

勢多だより

JUL
8, 2011

No. 90 平成23年度 滋賀医科大学 入学式



平成23年度新入生歓迎

平成23年度入学宣誓式
新任教員紹介

- 平成23年度 新入生研修
- 第36回浜松医科大学との交流会
- 平成22年度 卒業式



CONTENTS

メインテーマ：「平成23年度新入生歓迎」

トピックス

- 01 平成23年度入学宣誓式
- 03 平成23年度新入生紹介

新任教員紹介

- 06 4月 1日付 生化学・分子生物学講座 扇田久和 教授
- 07 4月 1日付 薬剤部 森田真也 准教授
- 08 5月 1日付 医療文化学講座 小島隆次 准教授

キャンパスライフ

- 09 第36回浜松医科大学との交流会
- 12 平成23年度新入生研修
- 15 リーダース研修
- 16 立命館守山高校との高大連携事業
- 17 医師・保健師・助産師・看護師国家試験の結果

図書館からのお知らせ

- 18 わたしがすすめるこの本

インフォメーション

- 20 平成22年度卒業式
- 24 名誉教授の称号授与
- 24 第34回解剖体納骨慰霊法要

編集後記（宮松編集長）

平成 23 年度 入学宣誓式



学 長
馬 場 忠 雄

入学式告辞

快晴に恵まれ桜も開花し、新入生の皆様の門出にふさわしい日となりました。

新入生の皆様、ご入学おめでとうございます。心からお祝い申し上げます。本日はお忙しい中、平成23年度滋賀医科大学入学式にご臨席を賜りましたご来賓の皆様、ご父兄の皆様、また教職員の皆様、誠に有り難うございます。

この度の東北関東大震災に際しまして、被災者の皆様に心よりお見舞い申し上げます。余震も続き、さらに原子力発電所事故による放射能汚染の問題も発生し、被災地においてのご苦勞と不安はさぞかしとお察し申し上げます。本学として DMAT チームなどの医療支援や物資の補給、義援金などで少しでもお役に立てる様に努めております。皆で力を合わせて一日も早く復興できることを願っております。

本日、医学科100名、看護学科70名（編入学生10名を含む）の入学生を迎え、キャンパスに若々しい活気が満ちあふれる喜びを感じております。これまで諸君を支えてこられたご両親、ご家族の皆様に心よりお慶び申し上げます。新入生諸君には、これまで受けた多くの方々のご支援やご協力を忘れることなく、皆様のご期待に応えるべく勉学に励むよう願っております。

本学は学問を学ぶにふさわしい緑豊かな自然環境に恵まれ、周辺には大学や県の文化施設があり、そして優秀な教員を揃えて、充実した医学・看護学の教育研究を提供する体制を整えています。倫理感に裏打ちされた医療知識と技術を獲得し、生涯にわたって自己研鑽する力を養い、医療人としてあるいは、基礎・臨床の研究者として、また今注目されているメディカルイノベーションの領域あるいは国際医療の場で活躍するなど多様な人材を育成する授業

を備えています。若い諸君は無限の可能性をもっており、いろいろなことに挑戦して下さい。

大学生は高校生とは異なり、自律性をもって行動することが求められます。自分自身で何が課題であるかを探し出し、自らが解決する方法を見つけ出す力を身につけること、また人と人との接点となるコミュニケーション能力を伸ばすことに努めて下さい。本学では課外活動として体育系、文化系のクラブ活動が盛んで、多くの友達と共に活動を通して体力や英気を養ってほしいと思います。

大学院博士課程に進学された29名、修士課程に進学された13名の皆様、ご入学おめでとうございます。医学・医療に対する社会のニーズは多様化し、学際的な生命科学研究や創薬に携わる人材のほか、福祉、介護、国際医療協力など様々な分野においてリーダーとなれる医療人が求められています。

研究の新しい発想は、先人の研究を詳細に検討することから生まれてくるといわれます。考えるばかりではなく、実験してはじめて、その方向性がわかるものだと思います。困難な状況が生じるかもしれませんが、その壁を乗り越えたときに優れた研究成果が得られると考えます。医学生命科学の分野は日々凄まじい進歩を遂げており、その一角に食い込むように努力して下さい。また、看護の分野においても新しい医療技術の導入とともに、患者のケアが重視され、患者の視点に立った看護研究の成果が期待されています。

大学が法人化された平成16年から第一期6年間の本学の教育研究、社会連携、国際交流、財務、業務などすべての達成度において全国で二位という高い評価を得ることができました。

平成22年度から、第二期6年が始まっています。SUMS Project 2010-2015「次世代を担う人材育成と医療科学・技術の創出」を全構成員で実行しています。すなわち、地域基盤型教育（Society-based Education）、特色ある研究（Unique Research）、先進医療と高度医療による心あたたまる医療（Mindful Medical Service）と組織活性化（Strategic activated Service）であります。地域医療の確保と医師不足の対策として、本学では15名の定員増となり、また、本年度から基礎研究医の育

成を目指し2名の増員を行い、入学定員は117名となっています。地域医療再生計画のもとに本学は国立病院機構滋賀病院、東近江市、県と協力して、今地域で求められている総合内科、総合外科の二講座を中心に、本学の機能を補填する形で支援します。臨床実習を充実するため Student Doctor 制の導入や客観的な臨床実習の評価を行うことになっています。研究においてもサルを用いた再生医療、神経難病、MR分子イメージング、生活習慣病予防、総合がん治療など、また、それぞれの研究者の研究においても優れた業績が上がり高い評価を受けています。附属病院においては、本年度末で再開発は終了し、病院機能とアメニティが充実することになっています。地域から期待されているオーダメイド医療などの先進医療と高度医療を通して、質の高い医療を提供しています。本学の学士課程における教育の到達度は、国家試験による認定資格の取得で評価されます。平成22年度の国家試験合格率は医師で99.06%で昨年に引き続き全国第一位、看護師、保健師、助産師全て100%は、全国で1位で、本学では初めてであり、大変喜んでおります。これらは、学生は勿論のこと教職員の努力の賜ものであります。一方、西日本医科学学生総合体育大会において、44大学中総合16位の成績であります。「よく学び」、「よく遊ぶ」、を両立しております。

このように本学は、教育、研究、診療においても高い評価を得ており、諸君は本学において学ぶことに誇りをもっていただくと同時に、本学の一員として本学を支える気概で日々研鑽してください。ところで、本日めでたく入学した諸君は、自分が何をやりたいか、どういう方向に進むのかを在学中に見出し、一旦決定したらいかなる困難も乗り越える強い精神力をもってやり遂げてほしいと思います。

2010年ノーベル化学賞は北海道大学名誉教授 鈴木章先生とアメリカ・パデュー大学特別教授 根岸英一先生とアメリカ・デラウェア大学名誉教授 リチャード・ヘック名誉教授の共同受賞で、「有機合成におけるパラジウム触媒クロスカップリング」が対象になりました。鈴木章先生は1930年に北海道鶴川(むかわ)村に6人兄弟の2番目として生まれ、理髪店を営んでいた父は、先生が16歳のときに急死されたので、母は行商をしながら学費を捻出し、先生自身苦学して北海道大学理学部化学科に進学し、さらに博士課程を修了、理学博士を取得し、1961年北海道大学工学部合成化学工学科助教授となりました。1963年からほぼ2年間アメリカインディアナ州のパデュー大学のハーバード・ブラウン教授のもとで有機ホウ素化学の研究を行っておられます。このときの経験が当時助手であった宮浦憲夫(のりお)(現在北海道大学特任教授)とのカップリング反応の研究に生かされ、1979年パラジウム触

媒を用いて有機ハロゲン化合物と有機ホウ素化合物を結び付ける、鈴木・宮浦カップリングの発見につながったのであります。この反応は、高血圧の治療に用いられているアンジオテンシンⅡ受容体拮抗薬や抗がん剤など医薬品、殺菌剤などの農薬、また、テレビ、携帯電話、パソコン画面の液晶、有機エレクトロルミネッセンスディスプレイなどに活用されています。

鈴木先生は幼少から大の読書好きで、通学路でも歩きながら本を読んでいたのが二宮金次郎ともいわれたようであります。算数が好きであったので、大学においても数学を志望していたようではありますが、北海道大学教養部の教科書であったハーバード大学フィーザー教授夫妻の著した「テキストブック・オブ・オーガニック・ケミストリー」に出会い、有機化学の道に進んだのであります。その後、後に恩師となるパデュー大学ブラウン教授の「ハイドロボレーション」というホウ素化合物の合成反応に関する本に魅せられ、ブラウン教授の研究に興味をもち、研究員として先生のもとで仕事をするようになったのであります。1963年7月からパデュー大学に留学し、有機ホウ素化合物の研究に取り組みました。

帰国後、ブラウン教授と分担し、研究を進めていきましたが、お互いの実験を追試し合うことになって、北海道大学で起きる反応がパデュー大学では起こらないことがあって、原因を調べてみると、北海道大学では不純物の多い窒素ガスを自分たちで精製して使っていました。有機ホウ素化合物は、純度のやや劣った窒素ガスに含まれた酸素が触媒となってある種の反応が行われたことに気がついたのであります。科学の研究では、偶然をうまく生かす能力あるいは手に入れた発見を Serendipity (セレンディピティ) といいます。鈴木章先生は、このセレンディピティに出会ったのかもしれませんが、先生は、「幸運は誰にでもやってくる」と言います。しかし、その機会を生かせるかどうかは、「自然を直視する謙虚な心」、「小さな光をも見逃さない注意力」が必要といっています。

希望や理想は他人からもらうものではありません。自分から考え作り出すものであります。入学生諸君は、多様な考え、好奇心を大切に、目的を明確化したあとは、どんなに苦難の険しい道であろうとも忍耐強く取り組んで下さい。そのあとには、希望に満ちた明るい未来が拓かれるのです。大学は、諸君の希望や志をサポートいたします。

新入生諸君は「志」を高く持って精進し、信頼される医療人として、また世界に羽ばたく研究者として、本学で自分自身を磨いて大きく成長してくれることを期待し、学長告辞といたします。

平成23年4月5日

生化学・分子生物学講座



教授 扇 田 久 和

平成 23 年 4 月 1 日付で生化学・分子生物学講座分子病態生化学の教授を拝命し、初めて本学に赴任致しました。まだ赴任して間もないですが、田舎育ちですので、緑あふれる静かな場所で研究できるこの大学の環境が気に入りました。大阪大学医学部を卒業後は、内科研修医を経て循環器内科の診療に従事しておりました。当時は、朝から夕方まで外来・入院患者さんの診察や検査、治療に加え、夜間・休日もほぼ年中無休で緊急対応などに当たっており非常に多忙でしたが、その分、診療技術が確実に向上しているのを体感でき、充実した毎日でした。

ところが、所属していた医局のローテーションで大学院に入学し、実際に基礎研究を行ってみると、臨床医療とは別の側面があって面白くなってきました。病院勤務時代は多くの患者さんの対応に追われ、深く考える時間はなかなか取れなかったのですが、基礎研究を行うようになってからは、動物実験でみられた現象のメカニズムなどについてもじっくりと考察できる時間が取れるのは楽しいことでした。さらに、あるメカニズムについて立てた仮説を、いくつかの問題をクリアして実証できた時の喜びや達成

感は格別でした。この様なことはごく稀にしか体験できませんが、逆に、この様な体験を時々でも味わってみたいという思いが、大学院入学以後、曲がりなりにも今まで基礎医学研究を続ける原動力になっていた気がします。

医学部卒業当初は将来、基礎医学研究で生活していくことなど全く想像していなかったのですが、大学院で基礎研究に触れたことが大きな転機になりました。新臨床研修制度の発足以後、最近は大学医局に属さず臨床診療を続けている医師も多くなったと聞いています。医局からの縛りが無い分、自由度が大きくなったと思いますが、その代わり大学に戻って基礎研究を行う機会もほとんどなくなっているのではないのでしょうか。日本では現在、医師不足・偏在も含めて臨床医療における様々な問題が指摘されていますが、基礎医学研究室の大学院生や研究者も激減しているようです。このままの状態が続けば日本の基礎医学研究も近い将来、深刻な状態に陥るかもしれません。

このような現状の打開になかなか妙案はありませんが、私としては、少しでも基礎医学に興味のある人には（全くなくても構いませんが）、是非ある一定期間、実際に手を動かして実験を行う機会を持ってもらいたいと思います。私もそうでしたが、手を動かすことで初めて分かる面白さがあります。また、基礎研究室で得た経験や研究思考は、基礎研究者として生きる人だけでなく、臨床医療に従事する人にとってもきっと役立つものと思います。私自身甚だ微力ではありますが、日本の基礎医学研究が危機的な状態になる前に、本学において一人でも多く基礎医学研究に携わる人を育て、今後の滋賀医科大学、ひいては、日本の基礎医学の発展に少しでも貢献していきたいと考えています。これからどうぞよろしくお願い申し上げます。

経歴

1995年 3月	大阪大学医学部 卒業	2003年 4月	国立循環器病センター研究所・研修生
1995年 5月	大阪大学医学部附属病院第一内科・研修医	2003年 5月	米国ハーバード大学医学部・博士研究員
1996年 6月	大阪府立病院心臓内科・研修医	2004年 4月	大阪大学大学院医学系研究科生化学・分子生物学講座・助手
1997年 6月	同 レジデント	2008年 4月	神戸大学大学院医学研究科生化学・分子生物学講座・准教授
1999年 4月	大阪大学大学院医学系研究科病態情報内科学 入学	2011年 4月	滋賀医科大学生化学・分子生物学講座（分子病態生化学）・教授
2003年 3月	同 修了		

薬 剤 部



准教授 森 田 真 也

2011年4月1日付で、滋賀医科大学医学部附属病院薬剤部の准教授に着任致しました。まず、私のこれまでの研究経歴について紹介させていただきます。大学4年生時の卒業研究を行うにあたり、薬学部としては最も臨床に近い病院薬剤部研究室を希望しました。卒業研究では、抗癌剤の腎毒性が薬物腎排泄に及ぼす影響に関する研究を行ったのですが、研究以外に薬剤業務に触れ、多くの薬剤師の方々と出会ったことも貴重な経験となりました。その後、大学院では、うって変わって物理化学系研究室に所属しました。ここでは、物理化学的視点から、リポタンパク質中に含まれるスフィンゴ脂質による動脈硬化発生機構に関する研究を行いました。そして、ポスドクの時には、京大院農学研究科の細胞生化学研究室にて、脂質トランスポーター ABCB4 の機能に関する研究に従事しました。ABCB4 とは、肝臓から胆汁中へリン脂質を排出するトランスポーターであり、これが異常をきたすと胆汁鬱滞や胆石症が生じることが知られています。この ABCB4 に関する研究は、前任地の神戸薬科大学を経て、現在も行っています。また、この研究から派生して、ホスファ

チジン酸・ホスファチジルエタノールアミン・ホスファチジルセリンなどのリン脂質を簡便かつ迅速に分析できる酵素定量法の開発にも成功し、現在多くの共同研究を実施しています。

こちらにきてからは、研究だけでなく、薬剤部の実務にも携わっています。昨年度まで私は、神戸薬科大学において調剤手技の実習を担当しておりましたが、典型的な課題を学生に教えることと、実際の現場で幅広い知識に基づいて状況に対応していくこととの差がいかに大きいものであるのかを、現在痛感しております。全国の大学薬学部において、6年制課程が2006年より開始し、来年の3月に初めての卒業生を迎えます。6年制課程への移行で大きく変化したところは、5年生時に病院と薬局でそれぞれ11週間かけて行う長期実務実習が必修となったことです。本学病院薬剤部でも、近隣の薬科大学などから長期実務実習生を受け入れています。薬剤師を目指す学生にとっては、この実習が初めての実践の場となります。何事も初めの印象が肝心であり、現場に対応できる知識・技能を教えていくことはもちろんですが、医療に携わる薬剤師としての姿勢もしっかりと伝えていかなくてはなりません。おそらく学生にとって戸惑いも多いでしょうが、精神面からも十分なサポートを行い、滋賀医大病院薬剤部で実習を経験した誇れる薬剤師を数多く輩出していけるよう努めていきたいと思えます。

まったくの未熟者でございますが、診療・教育・研究において充実した薬剤部が築けるよう全力を注いで参りますので、皆様のご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

経 歴

- | | | | |
|------------------|--------------------------------|----------|---------------------|
| 2000年 3月 | 京都大学薬学部薬学科卒業 | 2010年 4月 | 神戸薬科大学製剤学研究室講師 |
| 2002年 3月 | 京都大学大学院薬学研究科修士課程修了 | 2011年 4月 | 滋賀医科大学医学部附属病院薬剤部准教授 |
| 2004年 4月～2006年9月 | 日本学術振興会特別研究員 | | |
| 2005年 3月 | 京都大学大学院薬学研究科博士後期課程修了
(薬学博士) | | |
| 2006年10月 | 神戸薬科大学製剤学研究室助手 | | |

医療文化学講座



准教授 小島 隆次

このたび平成23年5月1日付で、医療文化学講座行動科学部門心理学研究室の准教授に就任致しました。皆様どうぞよろしくお願いたします。私は滋賀県生まれの滋賀県育ちで、生まれてから現在まで、実験・研究のために海外に滞在していた期間などを除きますと、ずっと滋賀県に住んでおります。

私の出身大学は京都大学ですが、京都大学では、学部から修士までを文学部・文学研究科で過ごし、その後、恩師の楠見孝先生や前所属拠点長の子安増生先生がおられる教育学研究科博士課程へと編入学し、博士の学位を取得しました。博士学位取得後は、PD 研究員及び助教として教育学研究科及び京都大学グローバル COE プロジェクト「心が活きる教育のための国際的拠点」でお世話になりました。文学部入学からおよそ16年間を京都大学で過ごしたことになりますが、現在も実験や共同研究の関係で毎週数日は京都大学に行っておりますので、あまり母校を離れたという感じはしません。

私の専門分野は認知科学・認知心理学になります。現在私が中心となって行っている研究プロジェクトは、(1) 空間認知と言語理解に関する基礎研究、(2) ネットワークや三次元仮想空間を利用した外国語CALL 教材の開発と教育効果研究、(3) 大学でのe-learning やネットワークを利用した講義に関する調査・実践研究 (4) 電子テキストコミュニケーションにおける感情語の研究、(5) 空間表現によるコミュニケーション研究、(6) 空間認知能力改善のためのゲームソフト開発とその効果検証、などです。そして、共同研究として、ロボットやソフトウェアエージェントの評価実験や幸福感の国際比較調査なども行っています。また、大学教育における教授方法や教育評価に関する実践的研究にも取り組んでいます。

滋賀医科大学では、心理学や行動科学関係の教養科目を担当していますが、意欲のある学生に対しては、研究室で行っている心理学実験やソフトウェア開発などに参加をしてもらうことで、授業外においても、“人”、ひいては“知”や“心”と呼ばれるものについてより深く考察する機会を提供できればと思います。また、私自身の大学教育に関する様々な実践・研究活動が、結果的に滋賀医科大学全体の教育環境をより良い方向に進めるような一助となればと思います。

経歴

1999年 3月	京都大学文学部人文学科行動・環境文化学系心理学専修卒業	2007年 3月	京都大学大学院教育学研究科教育科学専攻（教育認知心理学講座）博士課程修了（京都大学博士（教育学））
1999年 4月	京都大学大学院文学研究科行動文化学専攻（心理学教室）修士課程入学	2007年 4月	京都大学大学院教育学研究科研究員（学術研究奨励）
2001年 3月	京都大学大学院文学研究科行動文化学専攻（心理学教室）修士課程修了（京都大学修士（文学））	2007年10月	京都大学大学院教育学研究科研究員（グローバルCOE）
2001年 4月	京都大学大学院文学研究科大学院聴講生（2002年3月まで）	2011年 1月	京都大学大学院教育学研究科特定助教（グローバルCOE）
2002年 4月	京都大学大学院教育学研究科教育科学専攻（教育認知心理学講座）博士課程編入学	2011年 5月	滋賀医科大学医学部医療文化学講座行動科学部門心理学研究室准教授

第36回 浜松医科大学との交流会

去る5月13・14日の2日間、本学において第36回浜松医科大学との交流会が、両日とも五月晴れの快晴の下で行われました。

体育館での開会式では、本学の馬場学長、服部副学長他教職員と浜松医科大学の中村学長、小出理事他教職員の列席の下、あわせて600余名が参加して行われました。

また、期間中、総計で900名を超える両校学生の参加がありました。

交流会は2日間とも透き通るような快晴のもと、グラウンド、体育館、武道場等では熱戦が繰り広げられ、クリエイティブモチベーションセンターでは両校の管弦楽団による合同合奏練習が行われました。グラウンドでの準硬式野球の対抗戦では、浜松医科大学の小出理事による始球式が最初に執り行われました。

2日間の各クラブの対戦成績は9勝2敗2分で、一昨年、昨年に続いて本学の総合優勝となり、優勝杯を勝ち取ることができ、通算成績も本学の18勝13敗5引き分けとなりました。



平成23年度 第36回 浜松医科大学・滋賀医科大学交流会 競技結果

平成23年5月13日(金)~14日(土)

種目		滋賀	浜松
硬式庭球	男	△	4 - 4 △
	女	○	4 - 1 ×
サッカー		×	1 - 2 ○
準硬式野球		○	7 - 0 ×
バスケットボール	男	○	57 - 53 ×
	女	○	63 - 59 ×
バレーボール	男		不実施
	女	△	1 - 1 △
バドミントン	男	○	3 - 2 ×
	女	○	4 - 1 ×

種目	滋賀	浜松
ヨット	○	1 - 4 ×
剣道	×	1 - 4 ○
ハンドボール	○	25 - 21 ×
ゴルフ	○	1 - 1 ×
空手道		不実施
ボート		中止
総合結果 滋賀医科大学 9 対 2 浜松医科大学 2 引き分け		

※通算18勝13敗5引き分け(滋賀医科大学)



浜松医科大学との交流会を終えて

委員長 医学科第4学年 松永隆志

まず始めに、交流会を開催するに当たりご尽力いただきました先生方、職員の方々にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

今年で36回目を迎えるこの交流会ですが、本学の学生が、浜松医科大学の学生に呼びかけて始まった、という経緯があります。学校全体での行事でありながらあくまで学生主体のこの交流会に委員として携わせていただき、感謝の気持ちでいっぱいです。

今年には本学での開催となり、私は主に閉会式後のレセプションの準備を担当しました。全体で果たして何人が参加するのか、軽食の量はどれくらいがいいのか、など、全員に満足してもらうためにかなり頭を悩ませましたが、皆の楽しんでくれている顔を見てほっとしたのを今でも覚えています。当日に至るまで、同級生、後輩など多くの方に協力をお願いしたのですが、皆快く手助けしてくれ、とても頼もしかったです。学生が主体で動くとはこういうことかと知りました。

私は今回の交流会委員を通じて、学生同士が協力すればこんな大きな行事も実行できるんだということを学びました。これは、私達の学生

生活にもいえることだと思います。将来に向けて一人一人が自主的に行動するという姿勢が結果を生むのではないのでしょうか。

2日間大きな事故もなく、無事交流会を終えることができ、ご協力くださった皆様に改めて御礼申し上げます。また後輩たちには、来年以降も素晴らしい交流会が開催できるよう頑張ってもらいたいと思います。



浜松医科大学との交流会を終えて

体育会会長 医学科第4学年 秋山 亮

最初に、第36回浜松医科大学・滋賀医科大学交流会を開催するに当たり御尽力いただきました学生課・生協の方々、先生方、職員の方々にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

今回の交流会は滋賀医科大学の主催でしたが、滋賀を会場として交流会を行うのは個人的に初めてであり、更に体育会長として全体を取り仕切る立場で参加するという事でうまく交流会を進められるのか不安がありましたが、交流会委員長の松永君や各部キャプテンの協力により交流会を無事成功させることができました。

昨年も滋賀医科大学は交流会総合優勝を果たしており、今年も優勝を目標に交流戦に臨みました。競技では2日もとも天気に恵まれ、どちらも思う存分力を発揮出来たと思います。各部全力を尽くした結果、今年も優勝杯を勝ち取ることができました。最後のレセプションではどの部活も大学の垣根を越えて楽しく交流を深めている

のを目にし、この交流会が30年以上続いている意味が分かったような気がしました。

2日間大きな事故や問題もなく無事交流会を終えることができ本当によかったと思います。大学の垣根を越えた貴重な経験を後輩達にも是非経験してもらいたいのので後輩達にはこれからもこの交流会を途切れず続けていって欲しいと思います。



平成23年度 新入生研修

4月の7・8日の両日、近江八幡休暇村等において、平成23年度の新入生研修が医学科、看護学科の新入生及び引率教職員総勢190名の参加により行われました。

初日、休暇村はあたかも新入生を歓迎するかのような、透き通るほどの快晴となり、大自然の中での飯盒炊爨に始まり、講演では「滋賀の魅力」、クラス別、学科別懇談会や人権学習、2日目は瀧川看護学科長による「煙害等」の講習、保健管理センターについてを同小川講師による講習、滋賀県消費生活センター及び弁護士の方を講師に招いてのリスクマネジメント講習、陶芸体験など中身の濃い2日間となり、新入生はみな、この研修で多くの友人を作り、大学生活が始まりました。

新入生研修に参加して

医学科第1学年 山崎 愛実

入学式を終え、3日目。誰が誰かも全然わからないまま、宿泊研修に参加しました。これから始まる新生活に、私は不安でいっぱいでしたが、今振り返ってみると、この研修を通して滋賀医大での良いスタートを切れたのではないかと思います。

1日目の飯盒炊爨では、医学科と看護学科の境もなく、同じ班になった人と仲良くなることができました。煙で目が痛い、ご飯がなかなか炊けないなどと、困ったこともありましたが、その苦労も、出来上がったカレーをみんなで分け合って食べたことも、とても有意義な体験だったと思います。クラス別懇談会では、同じクラスの人の自己紹介や、先生方のお話など、色々な話を聞くことができました。特に、それぞれの人の将来の目標を聞いていると、私もこれから6年間頑張っていくという気持ちになりました。夕食後は、同じ部屋の人たちとたくさん話すことができ、笑顔の絶えない、本当に楽しい時間を過ごしました。

滋賀医大は全国から幅広い年齢層の人たちが集まる、個性豊かな大学だと思います。そんな恵まれた環境の中、仲間と切磋琢磨しながら医学を学ぶことができるのは本当に幸せなことです。その第一歩としてこのような研修に参加することができ、本当に良かったと思います。

看護学科第1学年 鷲田 奈緒

入学前にこの合宿があることを知り、まさか大学生になって飯盒炊さんや陶芸をするとは思ってもみなかったので、かなり驚きました。

私は同じ高校の友達もおらず、知り合いも少ない状態だったため、行く前は本当に憂鬱でした。

しかし、実際に合宿が始まってみると、活動を通してだんだんと友達が増えていき、楽しい時間を過ごすことができました。

最後には学科を超えて多くの人と仲良くなることができ、そのおかげもあって今、毎日楽しく大学生活を送ることができています。

これからの4年間を一緒に過ごす仲間と親しくなるきっかけとして、この合宿は本当に有意義なものだと思います。来年の新入生も是非参加し、たくさんの友達を作って、明るい気持ちで大学生活をスタートさせて欲しいです。



新入生研修に参加して

看護学科第3学年編入 藤原 雅実

大学に入るや否や、「宿泊研修」という想像外の文字を見た時には大変驚きました。私は編入生の中でも最年長、子持ちの主婦ですが、子供たちを実家に預け予定を空けて臨んだ研修でした。

入学式から3日目、充実した学内での研修の後にして最初のイベントは飯盒炊爨でのカレー作りでした。得意分野の持ち場につき、協力し合って作る過程は良い気分転換になり、医学科、看護科に限らず、どういう思いで今日に至り、なにを目指しているかを（話し合ったりすることができ）共有する場となりました。

人権学習や煙害などの講義はこれまでの知識を再認識するきっかけとなりました。

更に、カレー作りとは違う班割りでの夕食

後の時間を忘れる語らい、陶芸体験もこれから同じ学内で学習する仲間との絆作りになりました。

宿泊研修はこれからの学生生活において良い導入となりました。参加することができて良かったです。



新入生研修に参加して

医学科第1学年 金尾 亮

合宿初日の朝は青空で暖かく本当に良い天気でした。

バスを待っている間にもそれまで話したことがなかった人たちと話す時間もあり、「この合宿でいろんな人と知り合うことができそうだな」と期待に胸を膨らませてバスに乗りこみました。

休暇村に到着後すぐに飯盒炊爨にとりかかるといってタイトなスケジュールの中、ランダムで選ばれたであろう班のメンバーと一致団結し、煙や火加減に苦戦しつつもおいしいカレーを作ることができました。

その後、宿舎に入り、飯盒炊爨で体力をかなり奪われながらも滋賀の魅力や差別問題、里親支援のことを知ることができました。特に滋賀には彦根城を見に行っただけだったので、他にも滋賀で行ってみたい場所が増えました。

食事をすまし、少し遅めに温泉に入ると貸切状態で本当に気持ちよかったです。それもあってか、夜は早めに寝てしまいました。

二日目は、午後からは、あいにくの雨とな

りましたが、朝から煙草の害やリスクマネジメントについて学びました。午後の作陶では自分の不器用さにびっくりしましたが、むしろそれが楽しかったです。

最後に、この合宿で一番印象に残ったのは一日目のクラス別懇談会の時に田村先生がおっしゃられていた「自分のペースを大事にして過ごす」というお話でした。学生生活が始まり、時には周りに合わせることも必要だと思いますが、自分を大事にして頑張っていきたいと思います。



リーダーズ研修

本学ではサークル活動を有意義に発展させるため、リーダーとしての自覚と認識を高めると共に、各サークルの相互理解を深めることを目的とし、毎年、リーダーズ研修を開催している。

今年は3月2日（水）の13時からクリエイティブモチベーションセンターにおいて体育会系、文化会系の各課外活動団体の代表者（キャプテン）34名の参加の下、班別討議でのアドバイザーとして木村博生化学・分子生物学講座教授他計8名の教員が参加し実施しました。

当日は服部副学長の開講挨拶にはじまり、本学第2期生の江口豊救急集中治療医学講座教授による急性アルコール中毒や救急蘇生に関する講演や、同じく第12期生の朴真紗美氏による「考え方」と題した講演があり、また班別懇談会では自ら提案したテーマについて各班でクラブ運営の現状や問題点について話し合うなど充実した内容の半日間となりました。

新入生研修に参加して

文化会会長 医学科第3学年 霍 田 裕 明

3月2日、CMCホールにて文化会、体育会の各部代表者が集いリーダーズ研修が行われました。リーダー研修はまだ各部の代表者になって間もない学生達が、リーダーとして必要な資質、リーダーのあるべき姿そして緊急時の対応などを学び、考える為の集いです。

初めに副学長の挨拶から始まり、最初の講習では江口教授による救急蘇生等講習が行われました。この講習では、アルコールの危険性について学び、無理な飲酒をさせない、潰れた者を放置しないなどリーダーとして遵守すべき事を教わり、さらに緊急時のAEDの使用方法について学びました。

次に7、8人のグループに分かれて班別討議を行いました。ここでは私達は文化会でグループを作り、CMCの使用について、各部室の清掃問題について、そして文化会掲示板の利用方法などについて討議しました。私達



文化会は普段、部活同士で交流する機会が少ないため、この討議を通じて各部



活の活動状況や責任者の考え方などを知る事ができ、また交流を深められる貴重な集いでした。

そして次に朴真紗美先生による講座が行われました。ここではリーダーとしてどのように部活をまとめるか、そして結果を出すかについて考えるものでした。講義中に先生が話された「結果とは能力、熱意、考え方の掛け算です」というお言葉にはとても感銘を受けました。

夕方には病院食堂で交流会が行われました。講義された先生方と直接お話をさせて頂く事ができ、また各代表者と貴重な話し合いが出来ました。

この研修を振り返って、私を感じた事は、誰もがリーダーとして皆様々な問題を抱え、日々困難に直面しているということであり、その上でリーダーという困難に対して前向きにさせてくれる非常に有意義な研修だったと私は思います。

立命館守山高校との高大連携事業による 初めての講義が始まりました。

昨年（平成22年）12月に協定を締結した立命館守山高校との高大連携事業による本学での初めての講義が、5月13日（金）に臨床講義室2を会場として始まりました。

協定締結に先行して昨年11月に同校で医学部入門講座として1年生を対象に実施された、社会医学講座（衛生学部門）の埜田准教授による講義等の効果もあり、受講生は男子17名、女子15名の計32名と高校の予想を上回る人数となりました。いずれも、フロンティアサイエンスコース（FSC）の2年生で、医学科や看護学科等の医療関係学科を希望進路とする生徒です。

初年度の今回の講義は、医療基礎セミナーと題され、10月14日（金）までの計8回シリーズで実施されます。今回は初回ということで、立命館守山高校から中村副校長にもご出席いただき、開講に当たり、服部副学長と同副校長から、受講生へ激励の挨拶をしていただきました。

講義は、看護学科・地域生活看護学講座の安田教授に担当いただき、テーマを「地域医療の現状と課題」として、医療環境、地域医療の崩壊、終末期医療の三つを基本とする幅広い内容を解りやすくお話しいただきました。生徒たちは、日頃耳にはしているものの十分には理解できていないテーマについて、各種統計等の提示を受けながら実情について詳しく聴くことにより現状理解を深めた様子でした。講義終了後には、受講した生徒だけでなく、引率いただいた先生からも質問がありました。

当日は、立命館大学広報課から同大学ホームページにニュース掲載したいとして申し込みがあり、経済学部の学生が取材のため聴講・撮影・インタビューを行っていました。

今年度の事業はこのシリーズの他に、夏休みの8月に病理学講座の先生方による実習が1日予定されています。



講義の様子



服部副学長 激励の挨拶

医師・保健師・助産師・看護師国家試験の結果

第105回医師、第97回保健師、第94回助産師、第100回看護師の各国家試験の合格発表が平成23年3月に行われ、滋賀医科大学の合格状況は次のとおりでした。医師国家試験の合格率は、2年連続で全国第1位になりました。保健師・助産師・看護師の国家試験合格率が、新卒・既卒ともすべて100%になったのは開学以来初めてです。

【第105回 医師国家試験】

平成23年2月12日(土)・13日(日)・14日(月)実施

	卒業 者	受 験 者	合 格 者	合 格 率	備 考
新 卒 者	104名	104名	103名	99.0%	全国 受験者 8,611名 合格者 7,686名 合格率 89.3%
既 卒 者		1名	1名	100.0%	
計		105名	104名	99.0%	

参考 前回 第104回医師国家試験の結果

	卒業 者	受 験 者	合 格 者	合 格 率	備 考
新 卒 者	102名	102名	102名	100.0%	全国 受験者 8,447名 合格者 7,538名 合格率 89.2%
既 卒 者		2名	1名	50.0%	
計		104名	103名	99.0%	

【第97回 保健師国家試験】

平成23年2月18日(金)実施

	卒業 者	受 験 者	合 格 者	合 格 率	備 考
新 卒 者	68名	66名	66名	100.0%	合格率(全国) 86.3%
既 卒 者		1名	1名	100.0%	
計		67名	67名	100.0%	

参考 前回 第96回保健師国家試験の結果

	卒業 者	受 験 者	合 格 者	合 格 率	備 考
新 卒 者	73名	73名	69名	94.5%	合格率(全国) 86.6%
既 卒 者		0名	0名	0.0%	
計		73名	69名	94.5%	

【第94回 助産師国家試験】

平成23年2月17日(木)実施

	受 験 者	合 格 者	合 格 率	備 考
新 卒 者	12名	12名	100.0%	合格率(全国) 97.2%
既 卒 者	4名	4名	100.0%	
計	16名	16名	100.0%	

参考 前回 第93回助産師国家試験の結果

	受 験 者	合 格 者	合 格 率	備 考
新 卒 者	12名	8名	66.7%	合格率(全国) 83.1%
既 卒 者	0名	0名	0.0%	
計	12名	8名	66.7%	

【第100回 看護師国家試験】

平成23年2月20日(日)実施

	受 験 者	合 格 者	合 格 率	備 考
新 卒 者	58名	58名	100.0%	合格率(全国) 91.8%
既 卒 者	0名	0名	100.0%	
計	58名	58名	100.0%	

(注) 新卒者中10名は3年次編入学生で、既に合格済み。

参考 前回 第99回看護師国家試験の結果

	受 験 者	合 格 者	合 格 率	備 考
新 卒 者	63名	63名	100.0%	合格率(全国) 89.5%
既 卒 者	1名	1名	100.0%	
計	64名	64名	100.0%	

わたしがすすめるこの本

新入生・新入職員のみなさん、ようこそ滋賀医大へ！
本学の先生方・病院で医療に携わる方々からの、おすすめの本を図書館で
4月～5月まで展示しました。
おすすめ本、ご紹介します。



三ッ浪 健一 教授
家庭医療学

治せる医師・治せない医師 バーナード・ラウン著 築地書館
心室性不整脈の分類で大変有名で、ノーベル平和賞をも受賞した心臓専門医が、患者の心の声を聞く癒しの医療について述べています。単に専門医であるだけでは病は治せないのです。

私を変えてくれた患者さんのこの一言！ 日本医事新報社
患者さんの一言から診療現場の医師がどんなことを学んだかについて、主にプライマリ・ケアに関わる93人の医師がエッセイ風に書き留めています。良い患者医師関係の構築に役立ちそうです。

地域医療は再生する
—病院総合医の可能性とその教育・研修 松村理司著 医学書院
日本における地域医療崩壊、すなわち病院崩壊の理由とその打開策について書かれています。今後の日本の医療・福祉の在り方について示唆を与えていると思われます。



野坂 修一 教授
麻酔学

学生に与う 河合栄治郎著 文元社
私が学生時代に読んだ本です。



中川 文博 技士
臨床工学部

日本婦道記 一藪の蔭 山本周五郎著 講談社
山本周五郎の「日本婦道記」という婦人の道を、婦人の生き方をテーマにした短編集の中の「藪の蔭」をおすすめします。短編ですが「人の為そこまでやるか」という凄いお話です。またその男の妻もりっぱです。新人には是非読んで欲しい素晴らしい小説です。



足立 みゆき 教授
基礎看護学

それでも人生にイエスと言う V・E・フランクフル著 春秋社

どんな苦境にあっても、そのことには必ず意味があり、価値があることを気づかせてくれる本だと思います。

20歳のときに知っておきたかったこと
スタンフォード大学集中講義 ティナ・シーリーグ著 阪急コミュニケーションズ

大学生活の中では色々悩むこともあるかと思いますが、そんな時にお勧めなのがこの本で今までとは違う自分を発見し、悩みをチャンスに換えることができるはずです。

両性具有の美 白州正子著 新潮社

古事記にはじまり様々な素材をもとに、西洋とは異なる日本独自の美意識や美学を考えさせてくれる一冊だと思います。



桑田 弘美 教授
臨床看護学 (小児)

光とともに…—自閉症児を抱えて—(全15巻) 戸部けいこ著 秋田書店

自閉症児を育てるお母さんの育児漫画です。私たち医療者が、自閉症のあるお子さんとどのように関わると良いのか、考えさせられます。作者は15巻完成前に病気で亡くなり、絶筆となりました。作者の思いが伝わってきます。

ブレイブストーリー 上・中・下 (全3巻) 宮部みゆき著 角川書店

主人公のワタルが両親の離婚に遭遇し、平穏な毎日を取り戻すべく、異世界で冒険します。映画と違って、ワタルやミツルの心の奥の深い思いがじっくり描かれていて、勇気づけられます。

闘いの軌跡 —小児がんによる子どもの喪失と母親の成長— 戈木クレイグヒル滋子著 川島書店

小児看護の研究者である筆者が、博士論文として発表したものが基になっています。質的研究に興味を持つきっかけとなりました。



堀池 喜八郎 教授
分子生理化学
附属図書館長・
マルチメディアセンター長

高校生のための東大授業ライブ
高校生のための東大授業ライブ 熱血編
高校生のための東大授業ライブ 純情編 東京大学出版会

この3冊は表題の通り、東大(駒場)での高校生のための授業を書き直したものである。1人の先生が15頁前後の分量で学問を紹介(講義)している。1冊あたり14~15人の分担執筆。高校では習わない学問分野が多数。一つひとつ中身が濃い。どんな分野がどう学問になっているのか、研究するとはどういうことか。血沸き肉躍ること請けあいである。

生化学の夜明け 丸山工作著 中央公論社

生化学といえば代謝。代謝とくれば解糖系。高校生物や大学入試でもおなじみの解糖系はどのようにして明らかになってきたのか。それが、研究者の人となり、栄光と挫折を中心に、読みやすく書かれている。最終章の、日本人もかかわった、ついこのあいだの国際大発見競争。私の試験のヤマ中のヤマ、共用試験CBTでも問われるあの内容(F2,6P2)。3グループのうち勝者はだれ?

京都美術鑑賞入門 布施英利著 筑摩書房

京都の観光案内の本は星の数ほどあるが、この本はの中で光り輝く一等星。中学・高校生のために書かれた本だけあり、すいすい理解できる。しかも、ちゃんと学問的でもある。

一読すれば寺や庭や絵の見方が変わる。美の基本をつくった夢窓疎石という人を知るだけで得た気分になる。美術(芸術)は知識がないとわからないと思う。勉強したら理解度がぐんと上昇する。そうすると面白くなってくる。美の楽しみ方(人生の楽しみ方・すごし方)を教えてくれる本である。ちなみに「ちくまプリマー新書」(筑摩書房)は「さいしょの新書」と称し、若い人を対象とした新書で、多くの漢字はふりがな付きである。

平成22年度卒業式

平成22年度本学卒業式は、去る3月10日(木)午前10時から本学体育館において挙行され、学長から次のとおり告辞がありました。

告 辞

学長 馬場 忠雄

平成22年度滋賀医科大学卒業式を挙行するにあたり、ご多忙の中ご列席を賜りましたご来賓の皆様、ご父兄の皆様ならびに教職員の皆様に御礼申し上げます。

本日晴れて卒業の日を迎えられた医学科104名、看護学科68名の諸君に心よりお祝い申し上げます。また、諸君の学生生活を支えてこられたご家族の方々にお慶び申し上げます。

平成16年に新たに国立大学法人として「地域に支えられ、世界に挑戦する大学」を目指し、第一期6年間の中期目標と計画を立て、毎年、学生はじめ教職員が一体となって取組み、着実に実績を積み上げ、大学法人評価においても全国第二位という輝かしい成果を上げてまいりました。平成22年度から新たに第二期6年間の中期目標と計画を立て、実行しているところであります。第二期の主な目標は、本学にちなんでSUMS プロジェクト2010-2015「次世代を担う人材育成と医療科学技術の創出」にまとめています。SはSociety-based Education(地域基盤型教育)で、地域の方々のご支援とご協力により、患者さんの立場に立って考え感じられる人間性豊かな医療人の育成であります。UはUnique Research(特色ある研究)で本学の特色ある5つの重点プロジェクト、すなわち、サルを用いた再生医療、MR分子イメージング、神経難病、生活習慣病予防、総合がん治療であります。いずれも業績は世界のトップジャーナルに掲載され、高い評価が得られています。さらに独創的な研究を推進するため、基礎医学、臨床医学、看護学の研究分野の融合により、研究力のアップを目指します。MはMindful Medical Service(心あたたまる医療)であり、患者さんに先進医療とオーダーメイド医療や低侵襲医療などの高度医療を提供し、心あたたまる医療を通して地域医療に貢献します。SはStrategic activated Service(組織活性化)であり、業務の省力化と効率化、ITの導入、エコプロジェクトなどで組織を活性化します。

大学関連予算は、平成16年の法人化後毎年1%

ずつ削減されており、また公務員に準じて人件費は毎年1%ずつ削減が行われてきました。平成23年度政府予算案では、「強い人材の育成」や「メディカルイノベーション」を実施する方針により、また「元気な日本復活枠」のパブリックコメントにおいて36万通のうち28万通が文科省関係であったことから、文科省予算は幸い大きな削減がなく、-0.5%にとどまる状況であります。

しかし、教育、研究、診療の質の確保は厳しさを増しております。附属病院の収益は大学全体の予算の約2/3以上を占め、病院機能の充実が欠かせず、診療活動に重点を置かざるをえない状況であります。全国的にも臨床医学論文数が欧米では増加しているのに、わが国では-6.5%と減少しているであります。

大学と医療を取り巻く課題は大学附属病院ばかりでなく山積しております。地域医療の崩壊、医師不足、研究医不足、看護師、保健師、助産師の教育過程の改訂、特定看護師など多岐にわたります。

地域医療の崩壊に関しては、地域医療再生計画のもとに滋賀県において2次医療圏を中心に再構築が行われ、本学は、国立病院機構滋賀病院を中心に東近江市と市立能登川病院や蒲生病院とも関連した東近江医療センターに、寄附講座の総合内科学講座(教授を含め9名)と総合外科学講座(教授を含め5名)を開設し、教育、研究、診療を行います。総合内科学講座と総合外科学講座の教授および准教授、講師についても決定しました。

今後、総合内科、総合外科は、本学および本学附属病院と連携し学生の臨床実習や研修医の総合医としての研修を担当していただくこととなります。

一方、医師不足と地域医療の立て直しのため、平成19年度から新医師確保総合対策として暫定的な定員増が認められ、以降毎年地域の医師確保のための定員増がはかられ、平成22年4月まで全国医学部・医科大学で360人増となっています。本学においても現在10名が滋賀県からの奨学金を貸与されています。最近では、基礎医学で研究を志す医師

が著しく減少し、将来の医学教育の基盤を揺るがすことが危惧されています。そこで、平成21年度から研究医枠を設け定員の増をはかっています。本学においても、本学独自の奨学金により平成23年度入学者より2名増員となります。

これらの定員増は、9～10年間の期限付きであり、以降漸減することになっています。医学部の新設が新聞報道されますが、一旦医学部が設置されると、定員を減少することは困難となり、医師過剰は大きな社会問題となります。人口動態、高齢化など科学的根拠に基づいた医師数の策定が切に望まれます。

国家試験に合格した卒業生は、国家認定の資格をもった医療人として働くことができます。しかし、その資格は大学で学んだ知識や技能を基に、さらに日々の厳しい研修で、知と技に磨きをかけて、はじめて生きたものとなり、信頼される医療人として諸君も認められるのであります。日々の努力を重ね、苦難に直面しても正面から立ち向かう気概で「志」を高くもって取り組んでいただきたい。

ところで、滋賀県の膳所の出身で、アレルギーによる腎炎の発症機序を明らかにした「馬杉腎炎」で世界的に知られる馬杉復三先生についてご紹介します。

馬杉復三先生は、1896年（明治29年）大津に生まれ、膳所中学校、第三高等学校、さらに東京帝国大学医学部に進まれ、卒業後、病理学教室の副手を2年務めたあと、34才で千葉医科大学の助教授となり、1925年から2年間留学し、Freiburg 大学 Ashoff 教授のもとで単球の研究、そして Basel 大学の Rossle 教授のもとでアレルギー病理学を学んでいます。帰国後、千葉医科大学教授、医学博士の学位を取得しました。糸球体腎炎の病因については明らかではなかったため、アレルギー性疾患ではないだろうかと想像し、研究に着手しました。その成果は論文「抗腎血清による実験的糸球体腎炎について」として、千葉医学会雑誌第10巻第8号（昭和7年8月、1932年8月）に発表されました。この論文は抗腎血清投与による腎の変化は尿細管上皮ではなく、一次的に糸球体であり、それがアレルギー反応による血管系障害に起因するという理論的根拠を明らかにしたものであります。しかし、この発見に到るまで、ラットを使用した実験を繰り返し行い、腎の変化を詳細に観察し、次いでウサギを対象とした長期実験により人の糸球体腎炎に匹敵する腎の変化を遂に見出したのであります。父の研究生活は昼夜にわたり大変であった、とのことをご令息の日本医科大学病理学教授の馬杉洋三先生が父の思い出のなかで述べられています。馬杉先生は留学中に学んだ知識と技

術を実験に生かし、試行錯誤して考え抜いて実験系を確立し、馬杉腎炎を作り出したのであります。

これは医学の実験のみに言えるものではなく、日常の臨床において医師、看護師、保健師、助産師として患者さんの詳細な観察と分析、そして文献において調べることの大切さを教えてくれています。医療に携わる者にとっては常に新しい知識を吸収し、自分自身で工夫し、医療の場に生かし、患者さんの生活の質 QOL の向上につなげる努力が求められます。毎日忙しいのは当然であり、一刻の油断も許されません。しかし、僅かな時を見つけ、医療人として科学的根拠を求める姿勢が必要であります。

本学は、地域に支えられ信頼される医療人や世界に情報を発信する研究者の育成を目指し、開学以来37年を迎え、卒業生医学科2,909名、看護学科895名を送り出しております。先輩達は今日も大学教授として、卒業生の33名が大学の教育研究に活躍し、また、指導的な専門医、認定看護師、助産師、保健師として全国各地で幅広く活躍しています。

大学は在学中だけのものではなく、同窓生にも新しい知識や技術を提供するところであり、絶えず関連を持ち続けてください。先日、湖医会の渡辺一良会長がおみえになり、いよいよ本学においてホームカミングデイを平成24年1月8日、9日の両日にわたって、本学で開催することになったことをお聞きし喜んでおります。本学としても全面的に協力し、盛会に有意義な会になるよう支援していきます。是非参加して下さい。本学の卒業生としての自覚と自信や誇りを持って、本学の発展に貢献していただくことを希望します。

結びに、諸君が入学時に提出していた決意書を卒業証書と共に本日手元にお返しします。初心を忘れることなく、志を高く持ち続け、その達成を目指し、「一隅を照らす」人として日々努力を重ねられること、また一人一人幸多からんことを祈念し、学長告辞といたします。

平成23年3月10日



名誉教授の称号授与

学校教育法第 106 条の規定により、滋賀医科大学名誉教授の称号が下記の先生に授与されました。

平成 23 年 4 月 1 日

陣内 皓之祐

第 34 回解剖体納骨慰霊法要

5月28日（土）午前10時30分から比叡山延暦寺阿弥陀堂において第34回解剖体納骨慰霊法要を執り行いました。前々日からの梅雨により雨模様の天気でしたが、ご遺族、ご来賓、しゃくなげ会会員および学生、教職員総勢約330名が参列し、故人のご冥福をお祈りしました。

今回お祀りした32名の御霊並びにご遺族に対し、馬場学長から感謝の意が述べられるとともに、学生に対し、「医学教育のために自らの身体を捧げて下さった御霊のことをいつまでも忘れることなく、信頼される医師や人々の幸せに貢献する医学研究者として“一隅を照らす人”に育てられることを期待しています。」と述べられました。

続いて、学生代表 藤崎拓也君が、解剖実習で得られた知識と経験を礎として、故人のご遺志に恥じることがない医師となるべく生涯努力し続けることをご霊前に誓いました。

法要終了に引き続き、故人（献体者）に対する文部科学大臣の感謝状を学長からご遺族代表にお渡しし、併せて、学生の手によりご遺骨をお返ししました。

午後から予定されていた比叡山横川にある大学霊安墓地での納骨式は、あいにくの天候のため、ご遺族の皆様方にはご参列いただけませんでした。学長、副学長、しゃくなげ会理事長、学生代表2名と関係教職員が代表して墓地へ出向き、読経の中、焼香を行った後、分骨いただいたご遺骨を学生代表らがお一人ずつ納骨堂にお納めしました。



学生代表の慰霊の詞



学生によるご遺骨の返還



SHIGA UNIVERSITY OF MEDICAL SCIENCE

勢多だより

JUL 8, 2011

編集後記

3月に卒業生・修了生を送り出し、4月に新入生を迎え入れ、年度替わりのあわただしさが少し落ち着きました。新入生のみなさんも大学に慣れて学生生活を満喫していることでしょう。

学長の入学式告示にもあるように、大学時代は自律性とコミュニケーション能力をこれまで以上に伸ばす時期です。それは、近い将来、専門職として大きく羽ばたくことを助けてくれる大切な要素です。みなさんが良書良友に恵まれ、滋賀医科大学での学生生活が人生のかけがえのない一頁となるよう願っています。

編集委員長 宮松 直美

(勢多だよりの由来)

勢多は勢田、世多、瀬田とも書かれるが、古代、中世の文献では、勢多が多用されている。それに勢多は「勢（いきおい）が多い」という住字名称である。従って、いきおいが多かれと願う本学関係者の思いにぴったりということで、瀬田とせずに、あえて勢多とした。

(題字は、故 脇坂行一初代学長による)

勢多だより No. 90

発行年月日：平成23年7月8日

編集：「勢多だより」編集担当者会議

発行：滋賀医科大学広報委員会



滋賀医科大学
SHIGA UNIVERSITY OF MEDICAL SCIENCE

学章の説明

「さざ波の滋賀」のさざ波と「一隅を照らす」光の波動とを組み合わせたもの。
「中心に向かって、外からさざ波の波動－これは人々の医への期待である。外に
向かって中心から一隅を照らす光の波動－これは人々の期待に返す答えである。」